みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マダガスカル南西海岸部における漁家経済と農家経済：生業と食生活の分析から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5769

論　文



マダガスカル南西海岸部における漁家経済と農家経済 — 生業と食生活の分析から —

国立民族学博物館　飯田　卓

本稿では，マダガスカル南西海岸部のヴェズ村落における生業活動と食生活を記述・分析し，家計の成り立ちを論ずる。調査地は，沿岸に位置するF村と，F村から4km内陸に位置するK村である。F村では頻繁に海で漁をおこない，おかずとなる魚を主に生産している。いっぽうK村では農耕に重点を置き，トウモロコシ，サツマイモ，メロンなど，主食となる農作物を主に生産している。

両者においては，食料の入手方法も対照的である。K村では，農作物の多くを自給することにより，不安定な国内経済に由来する物価上昇のリスクを回避している。また同時に，食料備蓄を持たない親族の要求に屈して自分の備蓄を過剰に損失するという「リスク」をも回避するため，ほとんどの農作物を収穫直後に売り払う。つまりK村では，リスク回避の原理にもとづき，生産物の自家消費と売却のバランスをとっているといえる。これに対しF村では，物価上昇のリスクにも関わらず，海産物を売って得た現金で主食を購入する。このような家計維持は，ナマコやフカヒレなど高価な輸出向け海産物の採取によって可能となっているもので，F村の家計は利潤最大化の原理にもとづくといえる。

1．はじめに

マダガスカル島南西海岸部には，ヴェズ（Vezo）と呼ばれる漁民が広く居住している。このことはすでに植民地時代から知られており（Grandidier et Grandidier, 1908: 250），漁撈という生業によってヴェズは他の民族と区別されるといわれてきた（Koechlin, 1975: 23）。また，民族という概念を相対化した近年の研究においても，ヴェズというカテゴリーについての彼ら自身の語りが分析され，ヴェズのアイデンティティが海や漁撈と深く関わっていると指摘された。この研究によれば，ある人がヴェズであるかどうかはその人の出自には関係ない。海で生活するために必要な振る舞いを身につければ，その人はヴェズであるという。なかでも漁撈は，ある人がヴェズであることの根拠として，しばしば言及される（Astuti, 1995a; 1995b）。ヴェズの人々にとって，海という生活の場や漁撈という生業は，特別な意味を持ち続けてきたといえよう。

このように，周囲の農民と違ったかたちで漁民が自己を認知したり，外部から認知されたりする背景の1つとして，生業としての漁撈の特性をあげることができる。マレー半島東岸の漁村と農村を比較したFirth（1966）によれば，両者の社会の間には次のようにさまざまな差異が認められるという。①農村では大量の収穫が季節的であるのに対し，漁村では労働投入直後に漁獲が得られること，②このため漁村では生産物の備蓄が長期的ではなく，備蓄が皆無になってしばしば困窮するために，仲買人に融資してもらってリスクを分散していること，③専業漁民は主食となる作物を生産しないため，専業農民よりも強く交換経済に依存していること，④農村では家族の協業が広く見られるのに対し，漁村では主に肉体的な理由から男性が生産にたずさわり，大規模な集団を組織

2000年6月5日受付，2000年10月21日受理
連絡先：〒565-8511　吹田市千里万博公園10-1
e-mail：iida@idc.minpaku.ac.jp

する場合が多いこと，⑤船や漁具など，漁撈における生産手段は破損したり流失したりする確率が高く，投資の際には比較的大きなリスクを考慮しなければならないこと，などである。

ヴェズ漁民が住むマダガスカル南西部でも，漁村と農村の間には，生業としての漁撈の特性に由来する差異が見られる。しかし，マレー半島とは自然環境も社会経済条件も異なるこの地域では，漁村と農村に見られる差異はマレー半島とは異なるはずである。たとえば，漁村における備蓄の有無と量は資源量という自然条件に左右されるし，仲買人の融資も社会経済条件に左右されるであろう。いいかえれば，漁村と農村の差異とその要因を考察する過程で，自然条件や社会経済条件など地域の特性が浮き彫りとなる。

本論文の第一の目的は，マダガスカル南西部に位置する2つの村を取り上げ，生業活動や交換経済，食生活など，多様な側面から生計と経済の実態を記述することである。一方の村は沿岸に位置する典型的なヴェズの漁村であり，他方はそこから4 kmほど内陸に位置し，「ヴェズではあるがあまりヴェズでない」ないし「間違ったヴェズである」といわれる人々が住む村である[1)]。この2つの村の生業活動や食生活を定量的に比較してそれぞれの特徴を明らかにしたのち，両者の差異を地域の自然環境や社会経済条件に照合しながら考察することが，本論文の第二の目的である。

なお，以下ではそれぞれの村を便宜的に漁村と農村として区別したが，両村の生業は漁撈あるいは農耕に特化しているわけではない。両村とも漁撈活動と農耕活動をともにおこなっており，どちらの活動を重視するかという違いが村の性格の差異をもたらしている。

2．調査地と調査方法

（1）調査地

マダガスカル島南西海岸部は，島内でももっとも乾燥した地域である。2つの調査村にもっとも近い県庁所在地ムルンベ市（Morombe）[2)]では，年間降水量が453.7mm，年間降雨日数はわずか32日である。雨季と乾季の区別は明瞭で，月間降水量が30 mmを超えるのは12月～3月の4ヶ月に限られる。植生については，乾燥地に適応した植物が優占する有棘林*ala*（thorn bush）が広くみられる。有棘林地帯では一般的に農業生産性が低く，人口密度も低いが，河川流域と沿岸部には集落が密集している（図1）。

海域の特徴としては，サンゴ礁が発達していることがあげられる。マングキ川河口から南約70km辺りまでは，海岸線近くに発達する裾礁と，陸地からやや離れて海岸線と平行に発達する堡礁が交互に現われる（Pichon, 1972）。調査村の海岸は砂浜になっているが，堡礁の一部である。海岸線近くの礁原や礁池のほか，約5 km離れたヌサオ島（Nosy Hao）に至るまでの礁湖は，好漁場となっている。なお，河川の河口付近にはサンゴ礁に代わってマングローブ林*honko*が発達するが，調査村付近のものは規模が小さい。

調査をおこなったのは，海岸沿いのアンパシラヴァ村（以下F村[3)]と略）と，そこから約4 km内陸に位置するアンキリマリニカ村（Ankilimalinika，以下K村と略）の2ヶ所である。1996年の調査当時，F村は人口約200人，世帯数38であり，K村は人口約170人，世帯数33であった。K村のさらに内陸部は有棘林で，川も伏流となっているため集落がほとんどないが，50kmほど内陸に入ったオア

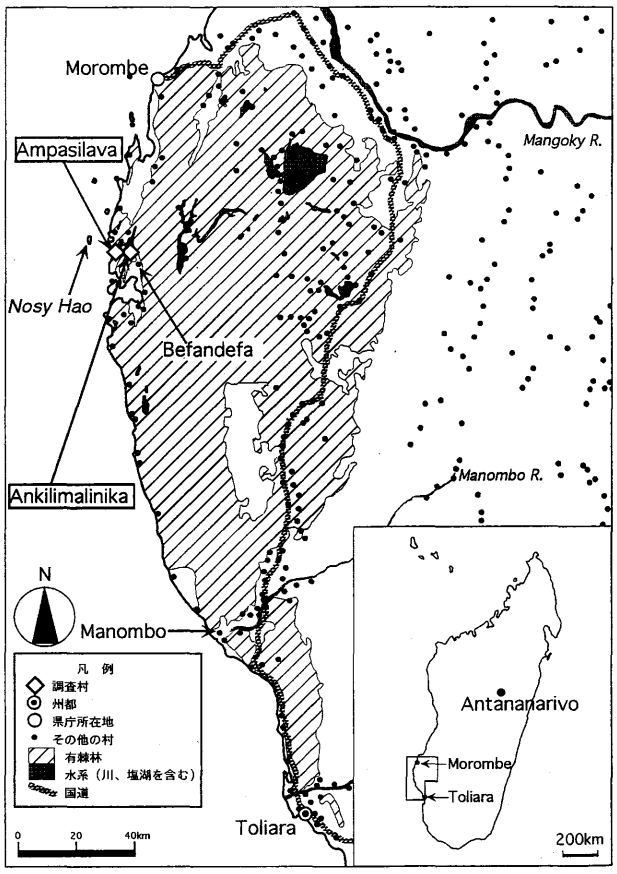


図1 調査地の位置と周辺の村分布
（Foiben-taosarintanin'i Madagasikara [1990, 初版1964] 発行50万分の1地勢図をもとに作成）

シス地帯には集落も多い。

海岸と内陸という地理的条件の差は，２つの村の暮らしにさまざまな違いをもたらしている。住民の移動手段の違いもその１つである。内陸のK村は，県庁所在地ムルンベから郡役場所在地ベファンデファ（Befandefa）に至る道路沿いにあり，雨季以外は自動車の通行も可能である。また，この道路からは多くの枝道が延びており，有棘林東縁のオアシス地帯や海岸部の村へ至ることが可能である。このため，K村の人々は，この道路を利用して２頭立ての牛車*sarety*（フランス語のcharretteに由来）で村の間を移動することが多い。たとえ牛車を所有していない人でも，牛車を持つ親戚に買い出しを頼むなどしており，牛車なしには生活できないほどだといってよい。

これに対し沿岸のF村では，牛車を所有する世帯が1997年には３つに増えたが，それまではわずか１つだった。F村の主な交通手段は，舷外浮材（フロート）のついたシングルアウトリガー式カヌー*laka*である（飯田，1998b）。村の間など長距離を移動する際には，キャンヴァス地の帆を張り風力を利用してカヌーを動かす。カヌーの欠点は内陸の村にたどり着けないことであるが，F村の人々はK村やベファンデファなど近隣の村へは徒歩で行き，それより内陸の村を訪れることはほとんどない。多くの用事や買い物は，海沿いの県庁所在地ムルンベですませられるからである。むしろカヌーは，順風さえ吹いていれば牛車より早く目的地に着けるし，揺れも少ない。雨季でも運行不可能ということはない。このようなカヌーの利点は，K村の人も認めている。彼らも，遠くの漁村に農作物を売りに行ったり急な用事でムルンベに行ったりするときは，F村の親戚や知人に頼んでカヌーを出してもらうことが多い。

（２）世帯と複合世帯

本研究では，生業活動や食生活に関する記述的データのほか，これらに関する定量的データを収集した。これらのデータは，個人を対象としたもの，「世帯」を対象としたもの，「複合世帯」を対象としたものに分けられる。本節では，世帯や複合世帯を定義し，ヴェズの家計分析において両者が重要な概念であることを示す。

ヴェズ社会でもっとも基本的な経済単位は，食物を消費する単位である。以下ではこのような消費の単位を「世帯」と呼ぶ。ヴェズの社会では，原則として，夫婦と未婚の子供たちから成る核家族が世帯として機能している[4]。それぞれの世帯は，主食となる農作物や副食となる魚，その他生活必需品などをおのおの調達しており，家計の単位であると考えてよい。世帯はまた，食事だけでなく１つまたは複数の家屋*tsano*を共有してそこに起居するので，最小の居住集団という側面も持っている。というより，家屋を共有する者たちが調理と家計を同じくするのだと言った方がよい。

いっぽう，漁撈をおこなう場合には，世帯を越えた協同が重要となる。漁撈においてはふつう，複数の世帯の男たちが協同で作業をおこない，漁獲物を分配し合う。ここでも世帯が家計（生産）の単位であると考えて問題ないのだが，時には，労働力を提供しなかったにもかかわらず漁獲物の分配にあずかる世帯がある。体力が落ちてあまり漁に出なくなった老人の世帯，カヌー製作などの現金獲得活動を主におこなう世帯，普段は一緒に出漁することが多いが何らかの理由によって出漁しなかった世帯などである[5]。このような場合には，漁獲物を分配し合う複数の世帯を１つの生産単位ととらえることができる。この単位の内部では，漁撈に参加する世帯が毎日のように交代するにもかかわらず，必ずといってよいほどすべての世帯に漁獲が分配される。このような世帯の集合を以下では「複合世帯」と呼ぶことにする。

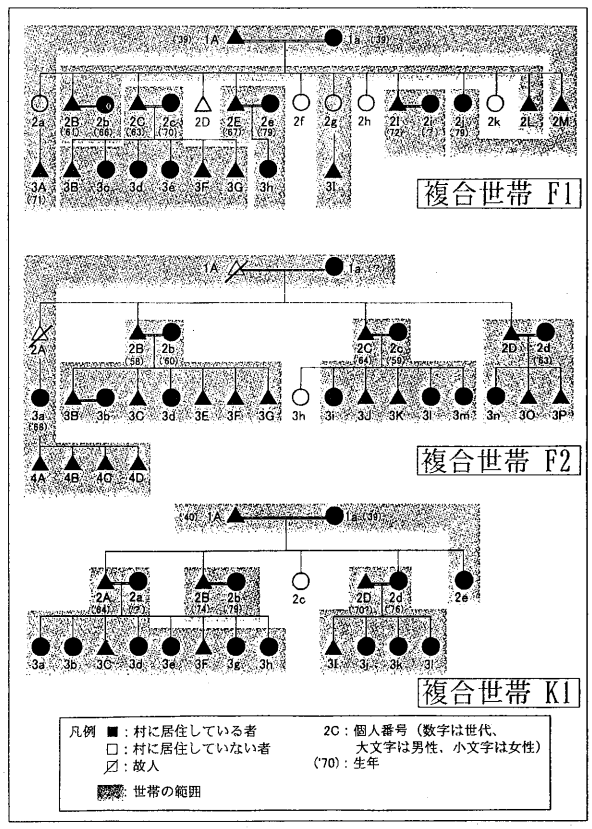


図２　調査対象となった複合世帯の家系図

消費の単位である世帯の構成が核家族の範囲と一致するのに対し，複合世帯は，拡大家族といえるような構成をとる。図2は，F村の2つの複合世帯（F1，F2）およびK村の複合世帯（K1）の系図である[6]。この図からわかるように，各世帯における夫婦のうち一方は，例外なく他の世帯の一員と親子またはキョウダイの関係にある。このことから，多くの複合世帯は，世帯が成長し分裂する過程で形成すると推測できよう。つまり，世帯の一員である子供たちは結婚すると親の世帯からは独立するが，しばしば親の家屋の近くに新しい家屋を建てる[7]。そして，漁をおこなう際には，親の世帯との間で労働力を融通し合ったり，漁獲物を与え合ったりする。すなわち，食事などの消費の面では親の世帯から独立しても，生産面では複合世帯の一員として活動するのである。また，複合世帯の範囲は，木の柵*vala*によって敷地*lakoro*（もしくは*foko*）が囲まれ，空間的にも明瞭な場合がある。図2に示した複合世帯のうち，家屋密度の比較的低いF2やK1の敷地は柵で囲まれていなかったが，F1の周囲は木戸のついた柵で囲まれていた。

なお，ここで用いる世帯や複合世帯は，ヴェズ自身によるフォークカテゴリーではない。世帯に相当するヴェズ方言は存在せず，家屋を共有する（*miharo tsano*）関係として言い表されるにすぎない。1つの家屋で生活をともにするのは親子*mpianake*であるとヴェズ自身が説明することもあるが，異なる家屋に住んだり家計を別にするからといって親子関係が断ち切れるわけではないので，上で説明した世帯とは異なる。また，複合世帯に相当する範囲をフク*foko*と呼ぶことがある。これはもともと親族を漠然と示す語であり，身近に住む親族のみを指すことから転じて，親族の住む敷地をも意味する。じっさい，1つの複合世帯の敷地には，しばしば柵がめぐらされている。しかし，多数の親族が同じ村に住んでいる場合，フクの範囲は文脈に応じて変化しうるので，複合世帯をフクと言い換えるのは適切でない。世帯も複合世帯も，あくまで，経済関係を記述するための便宜としてここでは用いた。

（3）調査方法

現地調査は，1995年10月から翌年9月までと，1998年1月から3月までの2回にわたっておこなった。定量的データを収集した時期とその方法は以下のとおりである。

①出漁聞き込み調査

両村における漁撈活動の頻度を比較するため，毎日夕方に村中のすべての世帯を訪問し，家族がその日にどのような漁をおこなったかを尋ねて記録した。調査対象は村内の既婚男女全員である。調査期間は，漁撈活動に影響する潮汐の周期が14.7日であることを考慮し，F村については1996年8月1日から14日までの14日間，K村については1996年8月16日から29日までの14日間とした。

②漁獲調査と農地面積調査

漁撈への依存度を把握するために，図2に示した3つの複合世帯において，漁撈活動時間と漁獲内容について調査した。1996年6月9日から22日までの14日間，F村に在住するF1とF2を1日交代で観察し，それぞれ7日分のデータを得た。また，K村に在住するK1については，1996年6月25日から7月7日までの13日間，1日おきに観察して7日分のデータを得た。観察の日には，午前6時から午後6時まで当該の複合世帯の敷地で過ごすようにつとめ，構成員が海に出た時刻と海から帰ってきた時刻を記録した。また，海から持ち帰った収穫物の数と重量を種類ごとに記録し，それらがどのように分配もしくは交換されたかを記録した。秤量には，携帯用のバネばかりを用いた。

同時に，農耕への依存度を把握するため，この3つの複合世帯が作付けした農地の面積を測定した。実施したのは，1998年の補足調査時である。作物が作付けられた土地は多角形と見なし，各辺の長さを歩測するとともに各角の角度を方位磁石によって測定した。これらの数値を，ベーシック言語で作成したコンピューターソフトに入力し，面積を割り出した。

なお，調査対象となった3つの複合世帯のプロフィールを表1に示した。F1はF村に住む複合世帯で，漁網を所有する。F2もF村に住むが，調査時には漁網を所有していなかった。K1はK村に住み，他のK村民と比べて頻繁に漁撈をおこなう。このように，3つの複合世帯は保有する生産手段や居住する村が異なっており，調査地域における家計の多様性を把握するのに適当と考えられる。

表1 調査対象となった複合世帯のプロフィール

番号	F1	F2	K1
居住村	F村	F村	K村
漁網所有の状況	所有	所有せず、のちに所有	所有(小型)
構成員数	22	27	21
成人男性数	6	4	4
成人女性数	6	6	4
少年数	4	10	1
幼児数	6	7	12

幼児は6歳未満、少年は6～14歳、成人は15歳以上とした

③タイム・アロケーション調査

2つの村の住民が毎日をどのように過ごしているかを把握するため，時間節約型スポットチェック法（Suda, 1994）により，村の既婚男女全員のタイム・アロケーション（time allocation）を調査した。この方法は，日中のさまざまな時間帯を選んで村の端から端までを歩き，集落内に見える人々の活動を記録するというものである。本研究では6時から18時までの時間帯を13に区切り，毎日1回ずつ村を歩いて，13日間ですべての時間帯の活動を観察した。不在の者については，行き先，目的，出発日時，帰宅予定日時を同じ世帯の構成員から聞き込んだ。調査期間は，F村では雨季（1996年1月15日～27日）と乾季（同8月1日～13日）に13日間ずつ，K村では雨季（同1月2日～14日）と乾季（同8月16日～28日）に13日間ずつおこなった。

④食生活聞き込み調査

2つの村における食生活の状況を把握するため，毎月1回，それぞれの村のすべての世帯を訪問し，前日の昼と夜にどのような食材をどのように調理して食べたかを聞き込んだ。調査期間は1995年10月から翌年9月までの1年間と，補足調査時の1998年1月と3月である。1996年9月と1998年1月および3月には，食材をどこでどのように入手したかも聞き込んだ。

訪問時に不在だった場合や，食事をしていたのが他の村や畑であった場合などは，有効回答としてあつかわなかった。また，1995～96年の12回の訪問調査のうち，有効回答数が7以下の世帯は集計しなかった。この結果，F村における23世帯とK村における22世帯が集計対象となった。集計にあたり，1回の食事で多種類の食材を食べていた場合には，1回を種類数で等分して数えた。たとえば，1回の食事で米とキャッサバを食べていた場合，それぞれを0.5回として計算した。

3．生業活動の比較

（1）漁撈

表2は，出漁聞き込み調査（調査項目①）の結果を男女別に示したものである[8]。まず男性について見ると，F村では7日以上出漁した者が4割近くいたのに対し，K村ではそのような者はまったくおらず，出漁日数が3日以下だった者が8割以上を占めている。平均出漁日数も，F村では5日，K村では1.5日と，F村の方が有意に多い（Mann-Whitney's U-test. U=77, n_1=23, n_2=20, $p<0.001$）。この傾向は女性についても同様で，F村では4日以上出漁した者が過半数を占めたのに対し，K村ではまったく漁に出ない者が過半数を占めた。また，女性の平均出漁日数は，F村で3.96日，K村で1.24日であり，F村の方が有意に多かった（Mann-Whitney's U-test. U=85.5, n_1=25, n_2=17, $p<0.005$）。すなわち，K村の人々も漁をおこなってはいるが，F村の人々の方が頻繁に漁をおこなう。しかも，F村には他にも遠隔地でナマコ漁をおこなっていた若者がいたので，両村の出漁頻度の差は表よりもさらに大きくなると考えてよい。

表2　2つの村における出漁日数の比較（14日間，単位：%）

	男性		女性	
	F村（23人）	K村（20人）	F村（25人）	K村（17人）
0日	8.7	40	16	52.9
1～3日	34.8	45	24	29.4
4～6日	21.7	15	48	17.6
7日以上	34.8	－	12	－
合計	100	100	100	100
平均出漁日数	5日	1.5日	3.96日	1.24日
標準偏差	3.12日	1.83日	2.62日	1.63日

F村の漁撈は多岐にわたるので別稿で詳しく述べることとし（飯田，2000），K村の漁撈活動について簡単に述べておく。K村は海岸から歩いて約1時間の距離に位置しており，漁撈をおこなうには不利な条件下にある。たとえば，K村の人がF村の人と同じ量の魚を捕ろうとすれば，同じ漁具と技術を持っていたとしても，往復2時間は余計にかかってしまう。また，F村で用いている百尋もあるような網を持って2時間も歩くのは大仕事である。さらに，村へ戻る際にはカヌーを海辺に置いてこなければならないが，安全なカヌーの保管場所はほとんどない。これらの事情から，K村では漁撈が盛んでなく，せいぜい小型の漁具で時たま漁をおこなう程度である。また，カヌーに乗って沖まで出漁することはない。

K村では3種類の漁法がおこなわれている。第一は，大潮の干潮時にサンゴ礁原でタコ *horita*（*Octopus* sp.）やナマコ *zanga*（Holothuroidea）をヤス *voloso* で突く磯漁りである。この漁法はF村でおこなわれているものと同じで，漁獲はF村の仲買人に売却する。第二は，マングローブ林でおこなうワタリガニ漁である。これは，マングローブ林の泥中にあるワタリガニ *drakake*（Portunidae）の巣穴を探し，ヤスでワタリガニを突く漁である。マングローブ林から離れたF村の人々は，この漁をほとんどおこなわない。漁獲したワタリガニは，おかず用としてK

表3 各複合世帯の漁獲量と漁獲効率（7日間）

略号	F1	F2	K1
漁獲量(魚類)	59.8kg	25.9kg	19.3kg
〃 (タコ・イカ類)	1.5kg	7.6kg	3.2kg
〃 (エビ・カニ類)	−	1kg	24.1kg
〃 (その他)	ナマコ1個	ナマコ17個	−
労働投入量(I)	45.28人・時	45.4人・時	39.02人・時
総漁獲量(O)	63,070 FMG	45,790 FMG	40,700 FMG
漁獲効率(O/I)	1,393 FMG/人・時	1,009 FMG/人・時	1,043 FMG/人・時

村や近隣の農村で売る。第三は，片手で運べる程度の小型漁網を用いた漁である。この網は，F村でもっとも小さな網の半分程度の長さ（約50m）であり，カヌーなしで行けるような浅い礁池で用いる。このような場所で捕れるのは，コトヒキ*jihy*（*Terapon jarbua*）やツバメコノシロ*bobokoro*（*Polynemus* sp.），ツッパリサギ*ambariake*（*Gerres acinaces*）などの幼魚が中心となるため，網の目合は細かく40mm程度である。捕れた魚は，K村や近隣の農村でおかず用として売る。F村では，小さな魚には商品価値がないため，このような漁はおこなわれていない。

つまり，K村でおこなわれる漁法は，カヌーを用いず小型の漁具のみを用いるものに限られる。したがってF村よりも生産資本への投資がはるかに小さいのだが，実際の漁獲効率を割り出してみると，F村に劣らないことがわかった。表3に示したのは漁獲調査（調査項目②）の結果で，3つの複合世帯の男性による7日間の漁獲量と漁獲効率の比較である。K1が持ち帰った魚の重量はF2より若干少ない程度で，内容はマングローブ林のワタリガニがとくに多かった。漁獲を金額換算[9]して漁獲効率を算出してみると，K1の漁獲効率は1,043FMG/人・時間で，F1よりは低かったがF2よりは若干高かった。海までの往復時間をも考慮すると，実質的な漁獲効率はF1より高いかもしれない。そのもっとも大きな理由は，K村では魚の流通量が少なく価格が高いためであろう。K村で販売量の多い小魚類の単価は，F村の1.7倍にも達する（注9参照）。

このように，K村の漁獲効率はF村に勝るとも劣らない。しかしF村では，この調査をおこなった期間以外に時おり，大漁の機会があった。それは，沖合いで大型魚群に遭遇したり，輸出海産物を求めて遠隔地に出漁したりするような場合である。これらを含めれば，F村の年間漁獲効率の平均は，表にあらわれるより高くなろう（cf. 飯田，2000）。これに対してK村の漁師は，浜辺近くの小魚やワタリガニを対象としているため，大漁に恵まれることはほとんどない。

（2）農耕

F村とK村および近隣地帯では，トウモロコシ*tsako*を中心に，サツマイモ*belè*，スイカ*voamanga*，メロン*kiseny*，ササゲ*lozy*，リョクトウ*antsiròka*などの間作（intercropping）がおこなわれている。また，キャッサバ*balahazo*やサツマイモを単作する畑もある。畑はいずれも常畑で，同一の耕地が数十年にわたって利用されている。

F村およびK村の農事暦は図3のように示すことができる。まず，雨季が近づく10月終わりから1月初めにかけて，スイカやメロンなどウリ類とトウモロコシの播種をおこなう。ササゲやリョクトウなどマメ類の播種もこの頃である。12月から1月にかけて雨が降りだすと，適当な長さに切ったサツマイモの茎を植え付ける。1月から2月にかけての短い雨季には，作物が生長すると同時に雑草も繁茂するので，除草が主要な仕事となる。除草には，鉄製の刃のついた鋤*antsoro*が用いられる。雨季の終わりにあたる2月末から3月にかけてはスイカやメロンの収穫が，雨季が終わった3月から5月頃にはトウモロコシやマメ類の収穫がおこなわれる。トウモロコシは，収穫後すぐ乾燥させてから脱粒し，袋詰めにして出荷する。6月から8月にはサツマイモの収穫がおこなわれる。サツマイモの一部も，収穫したのちスライスして乾燥させる。また，キャッサバを栽培している農家では，この時期にキャッサバの収穫および植え付けをおこなう。塊根を掘り出したのち，茎の一部を適当な長さに切り取り，掘り出した場所に再び植え付けるのである。

以上のような農事暦と作業内容は，F村とK村でほとんど違いがないが，農耕への力の注ぎ方はまったく異なる。まず，両村において畑を所有する世帯の割合は，F村では34％（38世帯中13世帯）にすぎないのに対し，K村では100％（33世帯中33世帯）である。それだけでなく，K村の男性は未婚の時から畑を耕し始め，次第に新

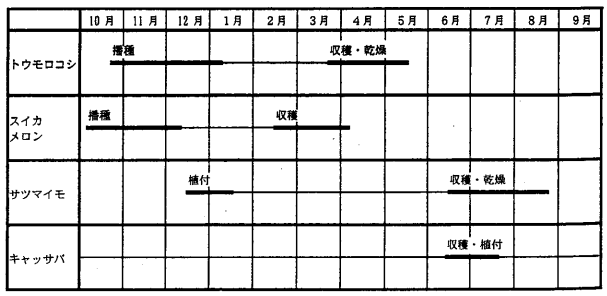


図3 調査地周辺の主要作物に関する農事暦

表4　各複合世帯の農地作付け面積（単位：m^2）

F1		F2		K1	
所有者	面積	所有者	面積	所有者	面積
F1-2B	484.7	F2-1a	3,264.0	K1-1A	11,971.8
				K1-1A	4,906.7
				K1-1A	1,458.1
				K1-2A	4,975.6
				K1-2B	986.4
				K1-2D	4,230.6
				K1-2D	925.6
合計	484.7	合計	3,264.0	合計	29,454.8

所有者名のうち、最初の2文字は世帯名に、最後の2文字は図2の記号に対応

しく土地を開いて複数の畑を持つようになるので，所有する畑の筆数はF村に比べてはるかに多い。

畑の数が多いだけでなく，作付け面積もK村の方がはるかに広い。その一例として，調査対象となった複合世帯による農作物の作付け状況（調査項目②）を表4に示した。F1とF2はF村における数少ない畑所有者で，なかでもF2の所有する畑はF村内でおそらくもっとも広い。いっぽうK1では，熱心に漁撈をおこなっていたことからも推察されるように，K村の他の世帯に比べて特別に畑が広いわけではない。それにも関わらず，K1の作付け面積は，F1やF2にくらべて明らかに大きい。K1では畑所有者の数が多いほか，それぞれの畑がF1やF2に比べて広い[10]。

さらに，農作業のきめ細かさについて見てみると，K村ではF村よりも熱心に除草しており，除草される面積もはるかに広い。それだけでなく，F村では牛による作物の被害が多いため，せっかく植えた作物が全滅するという事態も頻繁におこる。F村で食害が多い理由は，畑が牛の放牧地帯にあって監視が十分にできないことと，柵の手入れが行き届いていないことによる。1998年には，すでに3月中旬の時点で，F村の耕作者13人のうち2人が牛によって被害を受け，作物を全滅させていた[11]。これに対してK村では，畑がきちんと柵に囲まれており，そうした被害はまったく見られなかった。

（3）その他の生業

F村とK村には，漁撈と農耕のほかにいくつかの補助的な生業がある。第一は野生動植物の狩猟と採集で，野鳥を罠で捕らえたり，木の実を集めてきたりする。しかし，これらを頻繁におこなうのは主に子供たちであり，家計のためというより楽しみや娯楽の要素が強い。また，狩猟採集によって得たものはスナックとして消費されることが多く，正式な食事に出されることはほとんどない。

第二に，家畜と家禽の飼養である。両村とも，牛*aomby*やヤギ*bengy*などの家畜や，七面鳥*vorotsiloza*や鶏*akoho*などの家禽を飼養している。ヤギと家禽はもっぱら食用だが，祝い事などの特別なときに殺されるだけで，普段の食生活への貢献は少ない。牛は，牛車を引かせることを主目的とすることが多く，雌牛を含む多数の牛を群で放牧していたのはK村における2つの世帯のみであった。F村とK村で牛を所有していた他の世帯は，去勢牛を2頭ずつ飼っていたにすぎない。牛乳はせいぜい間食に飲まれている程度で，食生活への貢献は小さく，東のオアシス地帯などで利用されている乳製品*abobo*も調査地では見かけなかった。牛は，食料の供給源としてよりも，必要が生じた時に売却し多額の現金を得る手段として重要である。

第三に，雨季直前の塩*sira*の採集である。F村からK村に至る道筋には，イネ科およびカヤツリグサ科を中心とした草本の群落がパッチ状に広がっている。これは，雨季には付近が水浸しになり，小高くなった場所にだけ草本が生育するようになるためである。高潮時にはこの水たまりに海水が流入するので，雨季が終わって水が引いても土壌には多量の塩分が残される。このため，雨季になって最初の雨が降ると，塩分を含んだ水分が蒸発して地表に塩が析出する。村人たちは，最初の雨が降った直後の2週間ほどの間，この塩を盛んに採集する。雨季が本格的になると塩が雨水に溶け，窪地も水没するので，次の年まで採集できなくなる。このようにして採取した塩の売り上げは，短期的な収入源としては無視できないが，年間を通してみると採取される塩の量はそれほど多くない[12]。

第四に，買い入れた材料に手を加えて別の商品を作る加工業もみられる。両村でもっとも多いのは，パンケーキやコーヒーなど，間食用食品の加工と販売である。K村では魚のフライなどがこれに加わる。これはキナンガと同様，少額の資金で始めることができるが，家計への寄与は副次的である。このほか，F村ではカヌー製作がおこなわれており，2つの複合世帯がカヌー製作に従事している。いずれの複合世帯もムルンベ県では随一の腕前であると評価が高いが，そのうちの1つはF1である。F1が製作したあるカヌーは，材料費が35.5万FMGで，100万FMGの価格がつけられていた。言い値どおりにカヌーが売れれば64.5万FMGの利益となるが，これは，F1が2ヶ月半で消費するトウモロコシの購入価格に相当する。

第五に，F村やK村では，次のように小規模な商業活動もおこなわれている。

①生産物の他村での売却。主な対象は，F村でとれた海産物やK村で収穫した農産物，および両村で採集された塩などである。売却先までの輸送には，生産した個人がそれぞれの輸送手段を使う。売却先は，ムルンベ市や近隣の農漁村および東のオアシス地帯であるが，F村では牛車などの陸上輸送手段が限られているため，ムルンベ市が主な売却先である。

②他人の生産物を買い取り，他地域で売却して利潤をあげる仲買い。ヴェズの人々はこれをキナンガ *kinanga* と呼んでいる。F村では，魚やタコ，ナマコなどを買い付けて乾燥させ，ムルンベ市の仲買人に売却している。またK村では，漁村で買い付けた魚を燻して保存食に加工し，東のオアシス地帯で売却する。逆にオアシス地帯からは米やキャッサバ，ピーナッツなどを仕入れて，K村やF村で売却する。キナンガは，商店経営のように莫大な資金を必要としないため，臨時の収入などを元手として誰でも気軽におこなえる。しかしキナンガで得られる利潤は，元手が少ないだけに，漁撈や農耕からの収入に比べてわずかである。

③ムルンベの町から定期的に品物を仕入れてきておこなう商店 *dokany* の経営。F村とK村に1軒ずつある商店は，規模が小さいためキナンガに分類することもできる。しかし商店経営は，わずかの臨時収入を元手におこなえるものではなく，長期的な資金運用が必要である。両村の商店で売っているのは，米，キャッサバなどの主食や，砂糖，植物油などの調味料，タバコなどの嗜好品，石鹸，灯油などの日用品などである。これらの商店を経営するのは村人自身であり，漁撈や農耕をおこなう点で他の村人と大きな違いはない。

以上のように，F村とK村では，漁撈と農耕のほかにさまざまな活動がおこなわれて生計を補助している。しかし，商店経営とカヌー製作を除くと，それらの活動による家計への貢献は少ない。また，商店経営とカヌー製作をおこなうのは少数の村人に限られている。これらを考慮すると，F村においては漁撈が，K村においては農耕が主生業であると言ってさしつかえない。

（4）漁撈と農耕への時間配分

本節のまとめとして，両村の村人が漁撈と農耕にどれだけの時間を割いているかについて見ておく。表5は，両村の男性のタイム・アロケーション調査（調査項目③）の結果で，F村の既婚男性32人とK村の既婚男性30人が漁撈と農耕に各々どの程度の時間を割いているかを示した。まず，雨季の漁撈について見ると，F村では日中の14.7％の時間が日帰りの漁撈に費やされているのに対し，K村では2.6％にすぎない。それが乾季になると，F村では日帰りと泊まりがけを合わせて13.0％，K村では3.9％の時間が漁撈に費やされている。いずれの季節においても，F村の方がK村よりはるかに長く漁撈に従事しているといえる。

表5　2つの村における漁撈と農耕への時間配分（単位：％）

	雨季		乾季	
	F村	K村	F村	K村
漁撈（日帰り）	14.7	2.6	6.3	1.3
漁撈（泊まりがけ）	1.7	0	6.7	2.6
農耕（日帰り）	2.4	55.1	0.5	17.4
農耕（泊まりがけ）	0	0	0	22.6
その他・集落周辺での活動	65.6	25.1	56.3	29.5
その他・他村での活動	15.6	17.2	30.3	26.7
合計	100	100	100	100

次に農耕活動についてみてみる。ここでいう農耕活動とは，作物を直接世話することだけでなく，畑づくりのための伐採や畑の柵の手入れなど，畑でおこなうすべての活動を含んでいる。雨季には，泊まりがけの農耕はまったくおこなわれていない。日帰りの農耕については，F村では2.4％，K村では55.1％の時間が費やされている。乾季になると，F村では農耕をおこなう時間が0.5％に減る。K村でも農耕をおこなう時間は短くなるが，それでも17.4％の時間が農耕に費やされており，日帰りと泊まりがけを合わせると40.0％に達する。いずれの季節においても，K村の方がF村より長く農耕に従事しているといえる。

既婚女性の活動についても同様の分析をおこなったが，ほぼ同じ結果が得られたので，ここでは詳述を控える。以上から結論できるのは，F村では毎日の時間の多くを漁撈に割いているのに対し，K村では農耕に多くの時間を割いており，両者の生業が対照的だということである。とくに，F村において農耕が副次的活動にすぎないことは，畑の所有率や面積，畑に対する手入れの仕方，農耕にかける時間のいずれからも明らかである。

4．食生活の比較

（1）食生活の概要

ヴェズがふつう食事*sakafo*[13]と呼ぶのは，昼と夜の2回だけである。朝は食べないこともあるし，食べてもお茶などで簡単に済ませることが多いため，朝食と間食を区別することはむずかしい。栄養的にも分量的にも，ヴェズの人々が重視しているのは昼食と夕食である。そこで以下でも，昼食と夕食のみを食事と呼ぶことにする。

食事のさいに食べられる食材は，主食と副食に大別できる。ただし，主食に対応する語はヴェズ方言にはない。ここで主食と呼んでいるのは，他の食材に比べて量的に多く食べられ，炭水化物を主成分とする食品である。米，トウモロコシなどの穀物類や，キャッサバ，サツマイモなどの根菜類がこれにあたる。「（食事として）何を食べたか（*Nihina ino?*）」という質問に対しては，主食の食材名で答えるのがふつうである。これに対し副食は，主食に添えて出される少量のおかず（英語のside dishに相当）である。ヴェズ方言では*laoke*と呼ばれ，明らかに主食と区別されている。副食は，量的には主食に及ばず，省略して食べないことすらある。これは，食事時に必ず主食を食べることとは対照的である。副食となる食材は，魚や肉や豆類など，蛋白質に富む食品である。ただし，以下で副食と呼ぶのは，主食と別に調理されるおかず*laoke*だけではない。豆類のように，米やトウモロコシなど主食と一緒に少量だけ炊き込まれているものも含んでいる。主食とともに炊き込んだ豆類を*laoke*と呼ぶことはないが，このような場合はしばしば他のおかずが省略されるので，副食に含めた。

主食の調理方法を図4にまとめて示した。食材の種類は少ないが，多様な調理法があることがわかる。ただし，

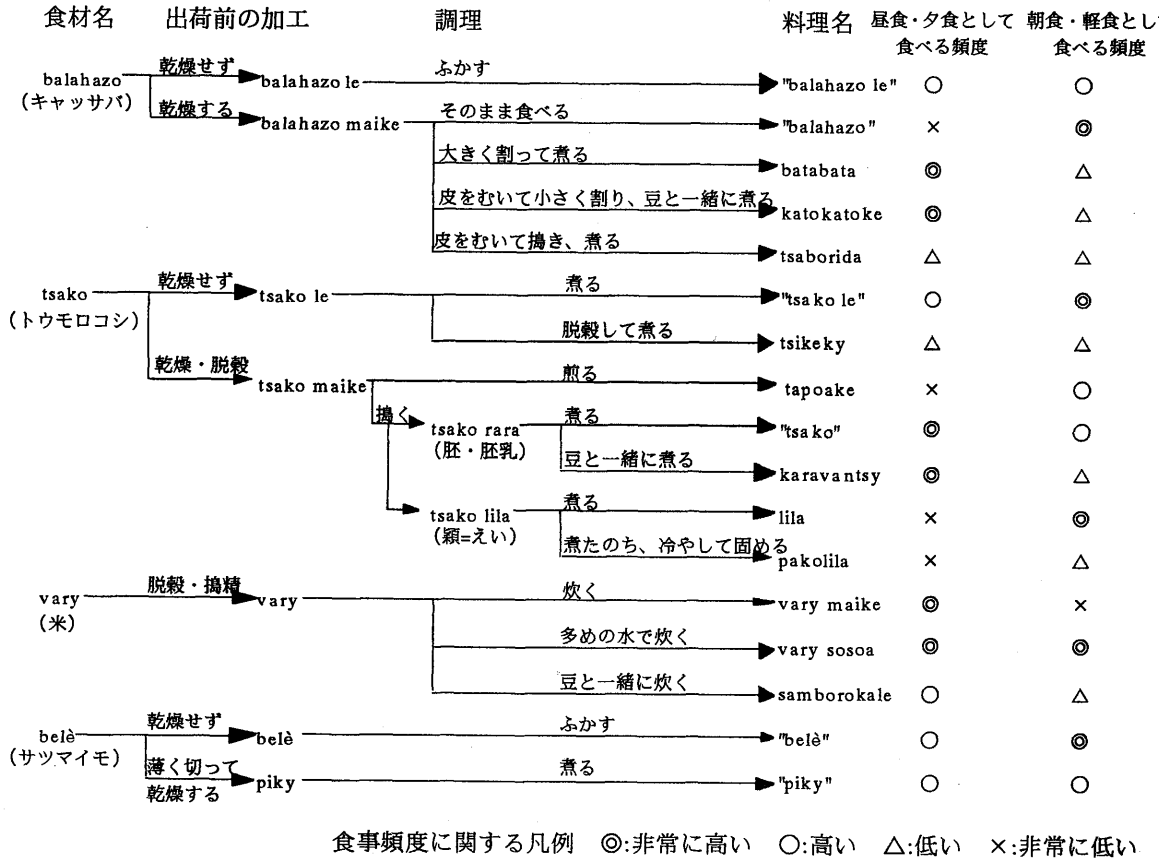


図4 主食の調理方法

いずれの食材においても，乾燥保存された食材を煮てやわらかくするという調理法がもっとも頻繁に用いられる。調査地において，主食となる作物のほとんど（米を除く）が収穫直後に乾燥されるのは，次の収穫期まで保存がきくようにするためである。生のキャッサバやトウモロコシ，サツマイモなどは，収穫直後にしか食卓にのぼらない。

キャッサバは，ヴェズがもっとも好む主食である。多くのヴェズは「キャッサバを食べないとすぐ腹が減る」と言い，キャッサバを「ヴェズの食べ物 *hanem-Bezo*」と呼んでいる。しかし，前述したように，調査地ではあまりキャッサバを作付けていない。調査地にキャッサバを供給しているのは，主に有棘林の東側および南側の人口稠密地帯である。F村はもちろん，農村であるK村においてさえ，ほとんどの人がキャッサバを商店で購入している。キャッサバが商店に出回らない季節になると，「早くキャッサバを食べたい」という声をしばしば耳にする。

これに対し，米 *vary* は高価で腹持ちが悪く（*tsy mahavintsy*），「外国人の食べ物 *hanem-Bazaha*」と考えられているが，来客をもてなす時に出す料理としてはむしろ「よい食べ物」とされている。葬儀における会食で出されるのは例外なく米であるし，死者供養の際にも米以外の主食が捧げられることはない。このように，米もまた重要な主食ではあるが，水の少ないこの地域では米がまったく栽培されていない。この地域に米を供給しているのは，主に有棘林の北側にある人口稠密地帯である。

トウモロコシが日常的な食事に頻繁に登場するのは，この地方で作付けられている唯一の穀物だからであり，キャッサバや米のように肯定的な評価が与えられているためではない。ヴェズの主食の大部分は，キャッサバ，米，トウモロコシの3品目でまかなわれている。聞き込み調査によると，主食とされる食材として，ほかにサツマイモ，スイカ，メロン，ライマメ *kabaro*（*Phaselous lunatus* L.）などがある。サツマイモ，スイカ，メロンは，後で述べるように，K村で季節的に食べられているだけである。ライマメが主食として食べられていた例はわずか1例で，通常は主食品目とは見なされていない。

副食の調理方法は，表6に示した。多様な調理方法があるが，主食の場合と同様に，日常的におこなわれる調理方法はかぎられている。食材の種類にかかわらず，も

表6　副食の調理方法

食材名	料理法	手順	備考
魚（サメ類を含む）	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atao karỳ	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	atao hosy	ゆでてほぐした魚肉を肝臓の油で炒める	肝臓に脂肪分の多い魚にかぎる
	endaze	油焼き	間食として食べられることが多い
	vendrane	干物	*ketsehe* にしてから食べるのがふつう
	asale	いぶし焼き	同上
	atono	おき火で焼く	正式な食事でなく間食となる
タコ・イカ	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atao karỳ	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	vendrane	干物	*ketsehe* または *karỳ* にしてから食べるのがふつう
	atono	おき火で焼く	正式な食事でなく間食となる
貝類	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atono	おき火で焼く	正式な食事でなく間食となる
カニ・エビ	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atao karỳ	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
肉	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atao karỳ	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	
	atao kitoza	干し肉	*ketsehe* または *karỳ* にしてから食べるのがふつう
	atono	おき火で焼く	正式な食事でなく間食となる
豆	*ketsehe*	塩を加え水煮	
	atao karỳ	油焼きしたのち、タマネギや香料で煮る	

っとも頻繁な調理方法は，塩を加えた水煮（*ketsehe*）である。これは，手間と材料費がもっともかからないからであろう。魚介類は熾き火で焼くだけの方法（*atono*）もあるが，これはむしろ間食として食べる場合に用いられる。主食に添える副食は，スープまたはソース状のもの*ro*でなければならないとヴェズの人々は言う。水煮はもっとも簡単な*ro*であるが，これにさらに手間をかけたものがカレー煮*karỳ*である。タマネギや香料とともに食材を少量の油で揚げたのち，水を加えて煮込む。油によってこくが出るほか，タマネギや香料の風味がつくために，水煮とは違った味わいがある。ヴェズの人々は，カレー煮をおいしいというが，材料費がかかるために日常的に食べてはいない。むしろ，油を摂取しすぎると体によくないと考えている。

魚類は，副食の食材として両村でもっとも頻繁に食べられていた。ヴェズの人々は，コチ*toho*（Platycephalidae）など味の悪い魚やゴンズイ*fiandolo*（*Plotosus lineatus*）など有毒の魚，小さな魚などをのぞき，近海でとれる大部分の魚類を食用としている。ただし，サカタザメ*soroboà*（Rhinobatidae）など大型の魚類は，イルカ*fesoke*（Odontoceti）やウミガメと同様，特定の家系において禁忌*faly*とされている。魚類のほかには，ワタリガニ，エビなどの甲殻類や，タコ，イカ，巻き貝などの軟体類も貴重な蛋白源となっている。

家畜や家禽の肉を食べるのは，それらが死んでしまった場合か，来客時やクリスマス*noely*などの祝い事，祖霊に対する供犠*soro*，あるいは葬儀の場合などに限られている。日常的な食事のために家畜や家禽を殺して食べることはほとんどない。また，現金で肉を購入する機会もほとんどない。葬儀の際に食べるのは牛，供犠の際に食べるのは牛かヤギ，来客時に食べるのは七面鳥か鶏である。豚は都市の肉屋で売っているが，村で食べることはほとんどない。これは，もともと食べる習慣がないためと，ヴェズの人々が信仰する憑依霊*doany*（もしくは*tsomba*）が嫌うと考えられているためである。憑霊信仰が盛んでない村では現金獲得のために豚を飼っているが，筆者の聞いたかぎりでは日常的な食事には供されていない。また，ヴェズの人々は，野鳥や野生動物を捕らえて食べることもほとんどない。

聞き込み調査によると，以上のほかにセイヨウカボチャ*betsenta*，ナス，豆類（リョクトウ，ササゲ，ライマメ），牛乳*ronono*，蜂蜜*tantely*などの食材が副食として食べられていた。このうち，ナスは調査地であまり普及しておらず，近隣の村から知人が持ってきたものであった。ライマメは，有棘林の北を流れるマングキ川流域では海外に輸出するほど多くの生産があるが（Ottino, 1963），K村およびF村ではまったく栽培されていなかった。カボチャとリョクトウ，ササゲは，K村でも栽培されているが，他の町や村で売るほどには収穫できない。

牛乳と蜂蜜は，食事としてよりも間食として飲んだり食べたりすることが多い。牛乳は，雌牛を飼養する者にとっては身近なはずだが，主食とともにおかずとして用いる例はほとんどなく，食生活調査で集めた905事例の中でも4例にすぎなかった。蜂蜜は，雨季の終わり頃に有棘林で採取されたものを行商人がF村やK村まで売りに来る。両村の村人が口にする機会は少なく，ほとんどの場合は間食として食べられている。「おかず」として回答があったのはわずか1例のみであった。これらの事例においては，牛乳と蜂蜜はいずれも調理されないまま食卓に上っていたが，主食とともに食べられていたのでここでは副食としてあつかった。

（2）主食の品目構成

ヴェズの人々は，昼食と夕食の違いは単に食べる時刻のみであり，食材や調理方法については同じだと考えている。しかし，食生活聞き込み調査（調査項目④）で得た資料を分析してみると，わずかな違いがあることがわかった。それは，主食品目の構成である。図5は，それぞれの食材を主食として食べた事例の割合を示したものである。両村とも，昼食ではキャッサバとトウモロコシの割合が多く，夕食ではそれらの割合が減って米を食べる割合が多くなっている。この差は統計的にも有意である（χ^2-test. F村: χ^2=101.78, df=3, p<0.001. K村: χ^2=14.82, df=3, p<0.01）。これは，「米は腹持ちが悪い」という評価に由来する。つまり，昼食は夕食と違って午後の行動を控えた食事であるため，腹持ちの悪い米を食べることが避けられているのである。

以上は，F村とK村における食生活の共通性である。そこで今度は違いについて述べる。図6に，F村における毎月の主食品目の割合を示した。この図では，昼食と

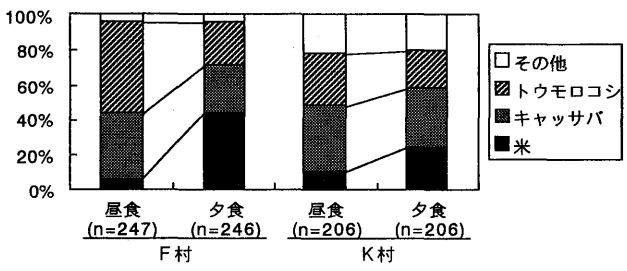


図5　昼食と夕食における主食品目の違い

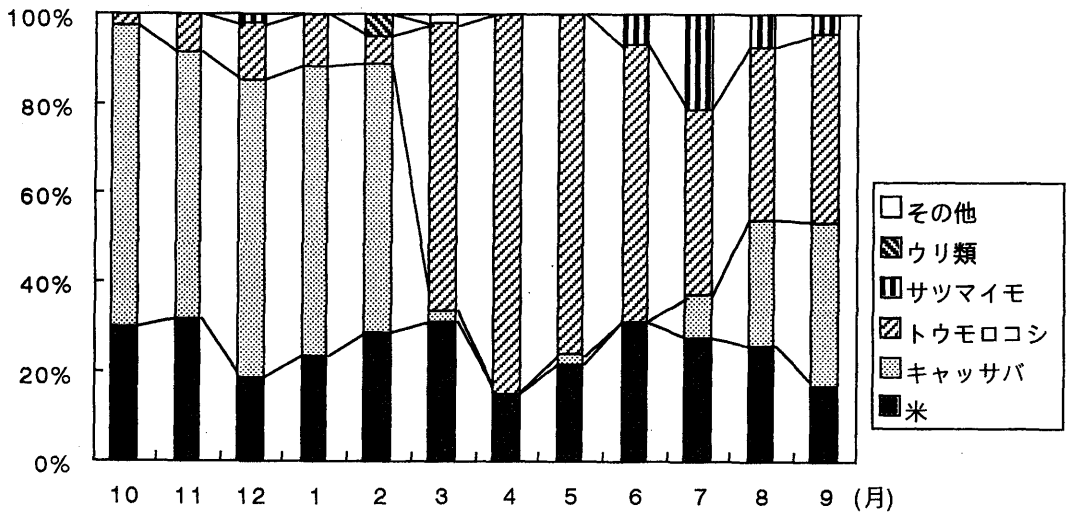


図6 F村における主食品目の季節的変化

夕食を区別せずそれぞれ1事例として数えた。これを見ると，キャッサバを多く食べる時期とトウモロコシを多く食べる時期があることがわかる。これに対し，米を食べる割合は年間を通じてあまり変化していない。キャッサバを多く食べるのは10月から2月にかけて，トウモロコシを多く食べるのは3月から7月にかけてである。このような季節的変化が生じる理由は，キャッサバの供給が年間を通じて一定でないことに関係している。キャッサバはふつう通年利用が可能と考えられているが，気候の季節変化が著しい調査地では明確な収穫期がある。大生産地帯である有棘林東方では，雨季が終わって3ヶ月ほど経った6月から7月頃に収穫が始まり，数週間のうちにすべてを収穫して乾燥後ただちに売却する。このためムルンベの商店では，7月末から10月頃までのあいだに倉庫がキャッサバでいっぱいになる。その後は農家からキャッサバの入荷がなく，在庫量が減るとともに単価が徐々に上がっていく。雨季が終わる3月頃になると，商店にはキャッサバの在庫がなくなり，いくら高い金を出してもキャッサバは買えなくなってしまう。これに対しトウモロコシは，商店の在庫が切れることがないうえ

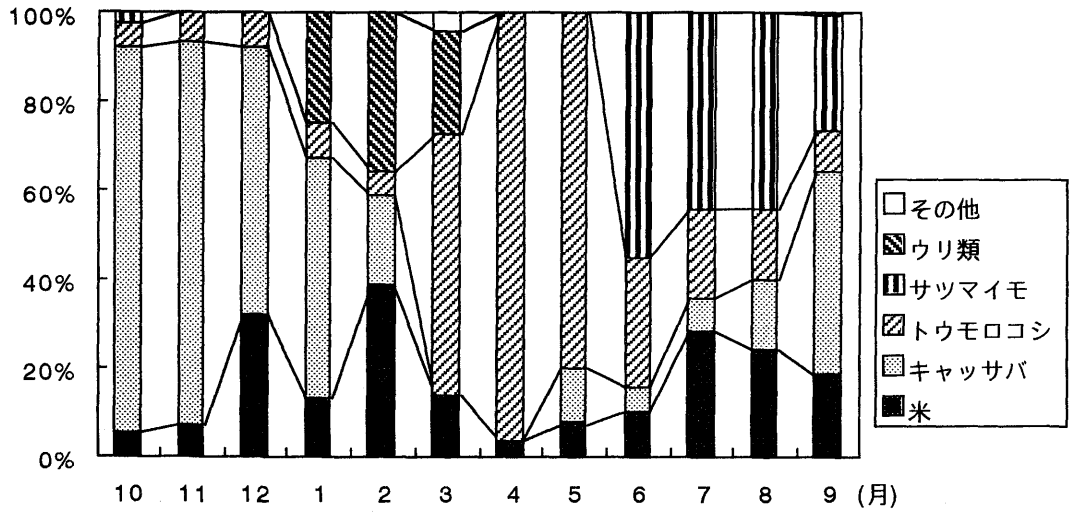


図7 K村における主食品目の季節的変化

米ほど単価が高くないため，キャッサバが尽きる3月から次の収穫が始まる7月にかけて頻繁に食卓にのぼる。

食生活におけるキャッサバとトウモロコシの割合の季節的変化は，K村でも同様に観察された。しかしK村の場合，変化のパターンはより複雑である。図7を見ると，F村ではあまり食べられていない作物が特定の季節にあらわれている。それは，6～9月にかけてのサツマイモと，1～3月にかけてのウリ類である。ウリ類にはスイカとメロンの両方が含まれている。正確にいえば，サツマイモとウリ類がF村で食べられないわけではない。朝食時や間食時には，F村の人々もこれらを好んで食べていた。つまり，F村ではスナックとしてこれらの作物を食べているのである。これに対してK村では，まさに主食としてサツマイモやウリ類を食べる。筆者の聞いた話によると，1回の食事で13個ものスイカを食べたという男性がいた。これらの作物は，市場に出しても売れ残ることがわかっているため大量に自家消費され，結果的にK村の食生活を支えているのであろう。

（3）主食の入手方法

以上から，F村とK村では家計の組み立て方が根本的に異なっていると推定できる。F村では，毎日の食費が家計支出の大半を占める。ところがK村では，自分たちで栽培した作物を主食にまわしているため，F村に比べて食費が少なくてすむ。サツマイモの収穫期（6～9月）およびウリ類の収穫期（1～3月）には，その差がとくに顕著になる。図にはあらわれないものの，おそらくトウモロコシの収穫期（3～5月）にも同様のことがいえるだろう。

このような主食自給率の違いは，両村の主食構成にさまざまな相違をもたらす。統計的検定をおこなってみると，F村とK村で同じ程度に食べられている作物はキャッサバのみであった（χ^2-test. χ^2=1.33, df=1）。米を食べる割合は，K村で有意に低い（χ^2=7.62, df=1, p<0.01）。これは，現金収入の少ない農民にとって米が高価だからであろう。逆に，トウモロコシを食べる割合（χ^2=18.11, df=1, p<0.001）と，サツマイモとウリ類を含む「その他」を食べる割合（χ^2=62.37, df=1, p<0.001）は，K村で有意に高かった。K村の農民はこれらの作物を自給できるためであろう。

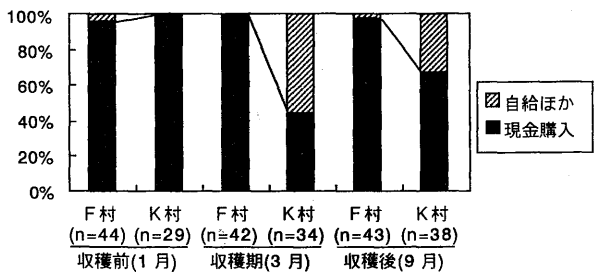


図8　主食を現金購入した食事回数の割合

このような家計の違いを明確にするため，主食を購入した事例と自給した事例の割合を図8に示した。親族や知人に主食を分けてもらった事例は，自給した事例に加えた。9月のデータは1995～96年の調査時のもので，1月と3月のデータは1998年の補足調査時のものである。1998年3月にはK村の人口の大部分が畑で起居しており，有効回答数が少なかったので，村でなく畑でとった食事の事例も有効回答の中に含めた[14]。

まずK村についてみると，収穫前の1月にはすべての世帯が主食を現金購入しているが，収穫盛期の3月になるとその割合は44.1％にまで下がり，収穫後しばらく経った9月には再び増加して66.7％となる。この数字は，主食作物を生産する農村にしては自給度が低いことを示している。K村の人々は穀倉のようなものを持たず，収穫した作物の大部分をただちに売却してしまう。そして，次の収穫期までの間，小規模な商業活動を営みつつ主食作物の一部を少しずつ現金で購入しながら生活するのである。自分で収穫した作物をほとんど蓄えずに売却してしまう理由について，K村のある者は「親族が食べ物をねだるから（*Satsia, mangatake hane longon-teña*）」であると答えた。収穫した農作物を長い間とっておくと，親しい者にねだられた時に断りきれず，結局は異なる世帯の者が消費してしまうというわけである。

ところがF村では，決して自給自足していると言えないK村に比べてみても，現金で購入した主食を食べる場合が多い。図8で「自給など」に含めた例は，1月の2例と9月の1例のわずか3例にすぎない。しかも，これらの事例はすべて，遠くの知人が土産として主食を持ってきたというケースであり，厳密には自給したとはいえない。統計的に見ても，収穫期である3月と収穫後の9月には，F村の主食自給度はK村より有意に低いといえる（χ^2-test. 収穫期: χ^2=31.30, df=1, p<0.001. 収穫後: χ^2=13.83, df=1, p<0.001）。K村における農耕は，現金獲得だけでなく，自家消費する食糧の獲得にも大きく寄与しているのである。

（4）副食の品目構成と入手方法

副食に用いられた食材の構成も，昼食と夕食のあいだ

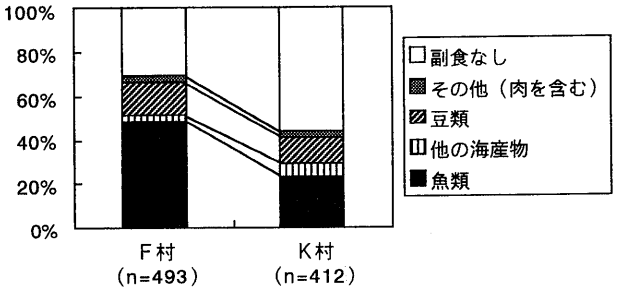


図9 2つの村における副食品目の比較

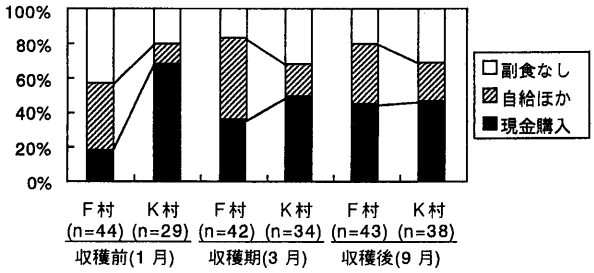


図10 副食を現金購入した食事回数の割合

で大きな差がなかった。食材の構成は調査時期によって変化してはいたが，主に天候による漁獲の有無が原因であり，季節的な要因によるものではない。そこで，すべての調査時期の昼食と夕食をまとめて，F村とK村における副食品目の違いを図9に示した。これを見ると，副食として魚を食べた割合はF村（48.0％）の方がK村（22.8％）よりはるかに多く，これは統計的にも有意である（χ^2-test. χ^2=63.80, df=1, p<0.001）。いっぽう，他の食材を食べた割合は，F村でもK村でもほぼ等しかった[15]。K村に多いのは「副食なし」の場合で，F村では31.2％であるのに対しK村では56.3％にものぼり，その差は有意であった（χ^2=58.77, df=1, p<0.001）。K村ではF村に比べると魚が手に入りにくいため，副食を食べない人が多いのである。

これらの副食を現金で購入した割合を，図10に示した。これをみると，いずれの時期においても似た傾向があることがわかる。それは，F村では副食を自給する割合が高く，K村では副食を現金購入する割合が高いことである。統計的な有意差は，1月に現金購入した割合（χ^2-test. χ^2=17.84, df=1, p<0.001）と，3月に自給した割合（χ^2=6.72, df=1, p<0.01）について見られた[16]。このように，F村ではK村よりも副食を自給する割合が高いといえるが，注意しなければならないのは，副食の自給度に関する両村の差が主食に関する差ほど大きくないことである。また，主食作物は毎日大量に消費され，欠かされることが決してないのに対し，副食はしばしば食べずにすまされる。このため，食糧供給の安定性について考えるときには，副食の自給度が高いことを過大に評価してはならないだろう。

5．考察

以上から，F村とK村では生業だけでなく家計戦略も異なっていることが明らかになった。まず，K村における家計は，アフリカの農家経済に広く見られる2つの特徴を持っている。第一の特徴は，年間を通して見た場合，作物生産が食料自給に大きく寄与していることである。第二の特徴は，いっけん第一の特徴と矛盾するように見えるが，収穫直後に作物の大部分が売却されてしまうことである。これら正反対の2つの特徴は，いずれも，不確定な条件下におけるリスク回避という観点から説明できる。

K村では，生存に必要な主食の大部分と副食の一部を自分たちで生産していた。このように食料をある程度まで自給する小農的な家計戦略は，市場経済の浸透とともに自給傾向を弱めていくといわれるが（Cancian, 1989），アフリカの農民は現在でも自給のための食料生産を活発におこなう（坂本，1998）[17]。これは，自然環境と経済（農産物価格）が不安定であるために，食料自給によってリスクに対処しなければならないからだと理解されている（cf. 高橋，1998）。

同時に，K村では，収穫以外の時期に自給率が低下するという現象も見られた。アフリカにおける他の貧しい農村では，収穫直後には売値が低いにも関わらず農作物を売却し，他の時期に同じ農作物を現金購入するという「過剰売却（oversales）」が見られる（Shipton, 1990）。その理由はまさしくK村の農民が語っていたとおりで，周囲の者たちが農作物を売却してしまった後に自分だけが農作物を備蓄していると，ねだられるままに農作物を分与しなければならないためである。もともと，周囲の者たちと取り結ぶ互酬的ないし相互扶助的な社会関係は，貧しい農家にとって救済を得るための手段であり，病気や事故，作付や収穫の失敗などの個人的リスクを解消するメカニズムでもあった。しかし，備蓄に余裕のある農家にとって，この互酬性原理は逆に，備蓄分の損失という新しい形のリスクを招く要因となる[18]。この結果，誰もが備蓄を有する収穫期以外には，多くの農民が作物を備蓄せず売却しようとする。なぜなら，自給食料に対する分配の要求が農民のモラル・エコノミー（Scott, 1976）にのっとっておこなわれるのに対し，現金はそのようなモ

ラル・エコノミーの対象にならないからである。

こうして，生産した作物を自家消費しようとするモチベーションと，それを売却しようとするモチベーションが同時に生じることになる。ある局面ではそれぞれに合理的だがまったく正反対なこれら2つのモチベーションは，季節により違ったかたちで折り合いがつけられる。すなわち，誰もが食物を持っている収穫期前後に自給度が高く，他の時期には低くなるのである。このように，K村の家計の特徴は，相反する合理性の均衡という観点から捉えることが可能である。

いっぽう漁撈を生業とするF村では，K村に比べればやや副食の自給率が高いものの，主食作物をまったく自給できず，漁獲を売却して得た現金で購入する。つまり，F村では自給よりも現金獲得に家計の主眼が置かれており，食料の大部分を自給しようとするK村とは異なるといえる。このように漁村が農村に比べて市場経済に強く依存することは，本論文の冒頭でも述べたように，他の地域では珍しくない。しかし，K村の家計を特徴づけるリスク回避の観点からは，F村の家計はきわめて不安定に見える。

調査地域は降水量が少ないので，K村では旱魃など自然災害のリスクが高い。いっぽう，F村では農作物価格の高騰という経済的なリスクが高い。いずれにおいてもリスクはつきものであるが，1970年代半ば以降におけるマダガスカルの経済的不振とそれにともなう物価上昇[19]を考慮するなら，農作物壊滅という事態が頻繁でないかぎり，K村のように最低限の主食作物を自給する方が安全なように見える。もちろん，F村の後背地が耕地化できなかったり，漁撈による生産性が農耕より明らかに高かったりすれば，話は別である。しかし実際には，F村では後背地に余裕がないわけではなく，日常的な漁獲も多いといえない。漁獲量の詳細は別稿で詳しく論じるが，1例だけあげておくと，複合世帯F2が7日間にあげた漁獲量は45,840FMG相当であった。いっぽう，この複合世帯では，1週間に少なくとも63,292FMGの主食購入費を必要としている。つまり，調査期間中の漁獲は，最低限の生活すら維持できない程度だったのである。にもかかわらず，冒頭で述べたマレー半島のように仲買人が融資をおこなっているわけでもない。それにもかかわらず主食作物をほとんど生産しないF村の家計は，きわめて不安定なもののように思われてくる。

この疑問を解くためには，F村の人々がおこなう漁撈を全体的に検討する必要がある。実は，F村の人々は村の近辺（地先）だけでなく140～240km離れた土地でも季節的な漁撈をおこない，そこで得られる莫大な漁獲によって家計を安定させている[20]。この遠隔地出漁においては，フカヒレを得るためのサメ刺網漁かナマコを得るための潜水漁がおこなわれ，漁獲物は海外向けの輸出品として高額で取り引きされる。たとえばナマコ潜水漁をおこなった複合世帯F2では，わずか2週間のあいだに1,303,000FMGに相当する漁獲を得ていた。これは，村の地先で同じ期間に漁をおこなった場合の10倍以上にのぼる漁獲であり，1年間の主食購入費の約4割に達する。また，遠隔地出漁とは比べものにならないが，地先漁撈においても，数日間の食費をまかなえる程度の大漁は時おり訪れる。これらの理由によって年間を通しての漁獲が多いとなれば，日常的には漁獲高が低く物価上昇の心配があろうとも，漁撈はむしろ安定した生計手段といえるであろう。ただし，農耕のようにリスクが少ないために安定しているというより，物価上昇などのリスクが問題とならないほど利潤が高いという意味で安定しているというべきであろう。いいかえれば，K村はリスク最小化により，F村は利潤最大化によって家計の安定をはかろうとしているといえる。

このように，互いに近距離にあり気候条件も類似する2つの村は，生業の比重の置き方を違えることによって対照的な生計戦略を営んでいる。この生計戦略の違いは，遠隔地出漁の盛んになった1990年代に顕著になったものであろう。それまでにもF村では漁撈が盛んにおこなわれていたであろうが，遠隔地出漁のような大口の現金収入源がなかった頃には，利潤最大化の傾向が著しかったとは思われない。むしろ，農耕を今よりも熱心におこなってリスク分散を図る傾向にあった[21]。このような時代には，漁撈は手軽な現金収入源として盛んにおこなわれていたのであろう。Astuti（1995a: 45-46）が指摘するように，「ヴェズの食糧探索［漁撈］は，その日その日に新規に始められる（a day-by-day affair）」ものであり，労働投入の成果がその日のうちに漁獲となってあらわれる。つまり，Woodburn（1982）の言う即時的利得システム（immediate-return system）と考えてよい。漁撈におけるこのような性格は，乾燥気候のために栽培される農作物の種類が少ない調査地においては，魅力的だったはずである。このようなリスク分散の一手段としての漁撈は，国際的な市場経済の浸透とそれにともなう海産物の価格上昇により，利潤最大化の手段としての性格を強めていったのだろう。

両村の差異は，今後ますます広がる可能性が大きい。現金経済と深くかかわるF村では，食糧生産の大部分を外部社会に委ねており，外部の影響を積極的に取り込まざるを得ないからである。両村の変化を継時的に見守ることは，アフリカ地域の近代化という問題を考えるうえでも重要であろう。

謝辞

本研究は，平成6～8年度および平成11～12年度に日本学術振興会特別研究員として筆者が受けた科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を資金として遂行されたものである。調査の計画段階から取りまとめに至るまで，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の市川光雄教授にはきめ細かな御指導をいただいた。同研究科の小山直樹教授，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の深澤秀夫助教授，東京大学大学院総合文化研究科の森山工助教授には，現地調査と論文作成の段階でさまざまな助言をいただいた。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の木村大治助教授には，農地面積算出のための自作コンピュータソフト"Vector Data Processor"を活用させていただいた。また，同研究科アフリカ地域研究専攻の教官および院生諸氏には，ゼミナールその他の場で貴重なコメントをいただいた。

この論文の出来あがりを支えてくださった皆様に感謝いたします。

注

1）農村の人々に対するこれらの評価は，主に沿岸部の人々によってなされるものだが，農村の人々自身もこのように語ることがある。「あまりヴェズではない」「間違ったヴェズである」という表現においては，ヴェズという語が「熱心な漁師」という含意を持っているようだ（cf. Astuti, 1995a; 1995b）。じっさい，マダガスカル標準語では「釣りをする者」*mpanjono*という語が漁師一般の意味に拡大して用いられるのに対し，ヴェズ方言では漁師を意味する適当な語がなく，しばしばヴェズという語が代わりに用いられる。
農村の人々をヴェズと呼ぶべきかどうかは微妙な問題であるので，稿を改めて論じたい。ここでは，2つの村が言語などの面でも類似している点を指摘するにとどめる。

2）Toliara州Morombe県。2つの調査村は，この中のBefandefa郡に位置している。

3）Ampasilavaという地名は，「An（～の場所）＋fasy（砂）＋lava（長い）」と分解できる。頭文字Aはマダガスカルの地名に非常に多いため，ここでは語根の頭文字であるFを村の略称として採用した。なお，Ankilimalinikaという地名は，「An（～の場所）＋kily（タマリンド）＋malinika（小さい）」と分解できる。

4）ただし，一度結婚した子供が配偶者と離婚したり死別したりした場合，「未婚者」として親のもとに帰って暮らすことがしばしばある。この子供にさらに子供が居た場合，食事と家屋を共有する「世帯」は3世代にわたることになる。娘が結婚しないまま出産した場合も同様である。

5）この点の詳細は，本論文のもととなった博士学位論文（飯田，2000）を参照。

6）この図では，ほとんどの世帯は夫婦と未婚の子孫によって構成されているが，F1の成員2Bを中心とする世帯は例外である。2Bの弟にあたる2Lや甥にあたる3Iは，本来ならば直系の父祖1Aと同じ世帯に属するはずであるが，2Bには子がいないため，2Lや3Iを養取した。子の養取にあたっては，第一子が生まれた場合と同様，子の実母の祖先に対して供犠*soro anake*がおこなわれたという。*soro anake*に関しては，Koechlin（1975: 133）およびAstuti（1995a: 92）を参照。

7）ヴェズの社会では夫方居住の傾向が強いため，ここで言う「子供たち」は男性である場合が多いが，それはあくまで傾向である。妻方居住の例は決して珍しくないし，どちらの両親とも関係ないまったく新しい土地で夫婦生活が営まれることもある。したがって，複合世帯内部の各世帯は父系的な血縁で結びつく傾向があるものの，決して厳密ではない。

8）ただし，調査期間中に7日間以上村を離れていた者は表から省いた。

9）1996年の調査時には，1 FMG（マダガスカル・フラン）はおよそ0.03円程度に相当した。同年におけるマダガスカルの1人あたり国民総生産（GNP）は約100万FMG（250ドル; Tudor, 1998），ムルンベ近辺における学校教師の月給は15万FMG程度であった。なお，マダガスカル村落部では，しばしば5 FMGをアリアリ*ariary*と呼んで通貨を勘定しているが，ヴェズの人々もこれをジャラ*drala*と呼び頻用する。
F1とF2による漁獲の金額換算レートは次のとおり。魚の単価は売却方法により異なり，村で魚加工をする漁師に販売した場合には800FMG/kg，自分で加工してムルンベで販売した場合には1,800FMG/kg，その他の形で販売または自家消費した場合には1,000FMG/kgとした。タコやイカは1,000FMG/kg，イセエビは9,000FMG/kgとした。
いっぽうK1では塩魚加工をおこなっておらず，魚の種類によって価格差がある。群をなして岸辺近くを回遊していた小魚（コトヒキ，サギなど）は1,700FMG/kg，群をなさずサンゴ礁に生息する小魚（ベラなど）は1,000FMG/kgとした。F村でまったく売れないコトヒキなどがK村で高価なのは，小さくとも数が多く，購入した世帯の内部で分けやすいためと思われる。また，ワタリガニは400FMG/kgとした。以上のレートは，売買された漁獲物を秤量して算出した。

10）K1-2Bの畑が狭い理由の1つは，広い畑を持つK1-1Aを頻繁に手伝い，自分の畑を耕す労力が十分でなかったためである。

11）付近ではF村の牛も放牧されているが，放牧頭数から考えれば，被害を与えたのはK村など近隣農村の牛である可能性が高い。しかし，このような事件について被害者が農民に不満を訴えることはない。F村の畑所有者は，柵の保守を怠ると損失を受けることを知りながら，壊れた柵を長期間放置する傾向にある。

12）麻袋1杯（約20 kg）の塩はF村で1,500FMGであったが，塩田のない村やムルンベの町では4,000FMGで売れる。1998年初旬にF2が採取した塩の量は正確にはわからないものの，明らかに麻袋20杯に達していなかった。いっぽうF1では，塩魚加工を頻繁におこなって多量の塩を必要とするため，自分たちの集めた分では足りずに他の者からも塩を購入していた。

13）*sakafo*はもともとマダガスカル標準語から借用された語と

思われる。この語に相当するヴェズ方言は*hane*であろう。しかし，ヴェズのあいだでは，*sakafo*は家族が集まって食べる正式な食事のみを指し，*hane*は他に食物一般をも指示する。

14) 3月におけるK村の有効回答数34のうち，村でとった食事の事例は9件にすぎず，残りは畑でとった食事である。なお，食事品目の構成は，村と畑のあいだで大きな違いはなかった。

15) ただし，魚類以外の海産物を食べた割合は，K村の方が若干多かった（χ^2-test. χ^2=4.96, df=1, p<0.05）。これは，K村の住民が，マングローブ林内のワタリガニ類や貝類を頻繁に採取するためである。

16) ただし，1月の調査時には状況が特殊だった可能性がある。調査時には普段（1995年10月～翌年9月）と比べ，K村で豆を食べた割合が48.3％と極端に高く，逆に何も食べなかった割合が20.7％と極端に低かったからである。

17) 市場経済化を進める立場からは，この傾向は農業部門の開発を阻害すると見なされる。このため，国際通貨基金と世界銀行は，農業部門の市場経済化を促すような構造調整政策を実施するよう各国に求めてきた（児玉谷, 1993; 原口, 1995）。マダガスカルでは1982年から構造調整政策を開始している（Tudor, 1998）が，K村ではそれ以前から収穫直後に大量の農産物を販売していたらしいので，農民の市場依存が構造調整政策の結果であるとは考えにくい。

18) 農民自身から証言が得られたわけではないが，このほかにも，盗難による備蓄損失もリスクの1つとして考えることができよう。

19) 1980年から1987年までの期間，マダガスカルにおける1人あたり国内総生産（GDP）は毎年0.3％の割合で減少しており，その間の物価上昇率は平均17.4％であった。この物価上昇率は，サハラ以南アフリカ地域の平均値よりも高い（Hodd, 1991）。

20) これについてはすでに筆者が簡単に報告してきており（飯田, 1998a; 1998b），準備中の論文でも詳しく論ずる予定である。

21) 複合世帯F2では，20年ほど前には今よりも熱心に農耕をおこなっており，1年間家族が食べられるほど多くのキャッサバを収穫した年もあったという（飯田, 2000）。また，F村ではこの20年間で著しい人口増加があったにもかかわらず，畑の数はあまり増えていないようである。

参考文献

Astuti, R., 1995a. *People of the Sea: Identity and Descent among the Vezo of Madagascar*, Cambridge, Cambridge University Press.

Astuti, R., 1995b. "'The Vezo Are Not a Kind of People': Identity, Difference, and 'Ethnicity' among a Fishing People of Western Madagascar," *American Ethnologist*, 22(3): 464-482.

Cancian, F., 1989. "Economic Behavior in Peasant Communities," In Plattner, Stuart (ed.) *Economic Anthropology*, Stanford, Stanford University Press.

Firth, R., 1966 [1946]. *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*, London, Routledge & Kegan Paul Ltd.

Grandidier, A. et G. Grandidier, 1908. *Ethnographie de Madagascar, tome IV*, Paris, Imprimerie National.

原口武彦，1995.「構造調整とアフリカ農業」原口武彦（編）『構造調整とアフリカ農業』アジア経済研究所，pp.3-9.

Hodd, M., 1991. *The Economies of Africa*, Aldershot, Dartmouth.

飯田　卓，1998a.「マダガスカルのナマコ漁」『月刊アフリカ』38 (2): 9-13.

飯田　卓，1998b.「マダガスカルの海洋民ヴェズ」『季刊民族学』86: 59-67.

飯田　卓，2000.「マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける市場経済の受容―その生業と家計経済に関する人類学的研究」未刊行博士学位論文，京都大学大学院人間・環境学研究科.

児玉谷史朗，1993.「アフリカにおける商業的農業の発展と経済発展，国家」児玉谷史朗（編）『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所，pp.3-18.

Koechlin, B., 1975. *Les Vezo du sud-ouest de Madagascar: contribution à l'etude de léco-système de semi-nomades marins*, Paris, Mouton.

Ottino, P., 1963. *Les économies paysannes malgaches du Bas Mangoky*, Paris, Editions Berger-Levrault.

Pichon, M., 1972. "The Coral Reefs of Madagascar," In Battistini, R. and G. Richard-Vindard (eds) *Biogeography and Ecology in Madagascar*, Hague, Dr. W. Junk B. V. Publishers, pp. 367-410.

坂本慶一，1998.「アフリカ農業の内発的発展―その可能性を探る」高村泰雄・重田眞義（編）『アフリカ農業の諸問題』京都大学学術出版会，pp. 27-56.

Scott, J., 1976. *The Moral Economy of Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*, New Haven, Yale University Press.

Shipton, P., 1990. "African Famines and Food Security: Anthropological Perspectives," *Annual Review of Anthropology* 19: 353-394.

Suda, K., 1994. "Methods and Problems in Time Allocation Studies," *Anthropological Science* 102 (1): 13-22.

高橋基樹，1998.「現代アフリカにおける国家と市場：資源配分システムと小農発展政策の観点から」『アフリカ研究』52: 1-28.

Tudor, G., 1998 [1971]. "Madagascar: Economy," In *Africa South of Sahara 1999 (28th Edition)*, London, Europa Publications, pp.638-643.

Woodburn, J., 1982. "Egalitarian Societies," *Man* (n. s.) 17 (3): 431-451.

(Summary)

Fishing and Farming Economies in the Southwestern Coastal Area of Madagascar: An Analysis of Production and Diet

Taku Iida
National Museum of Ethnology

This paper describes and analyzes the household economy of the Vezo in the southwestern coastal area of Madagascar, with special reference to production activities and diet, based on research conducted in two villages: F (Ampasilava) on the coast and K (Ankilimalinika) which is 4 km inland from F. While these two villages are located close to each other and have similar cultural and linguistic traditions, a slight difference in their geographical locations produces differences in both their economic and dietary life: 1) The F villagers go more frequently to the sea for fishing, whereas the K villagers specialize more in agriculture than in fishing; 2) Thus, the F villagers acquire fish more easily, whereas the K villagers obtain substantial amounts of agricultural crops, such as maize, sweet potatoes and melons; 3) The main products in F village are consumed as a side dish, while those in K village are staple food.

The most marked contrast between the two villages is revealed by the analysis of food procurement: K villagers tend to make a living based on the principle of risk reduction, whereas F villagers on the profit maximization. The K villagers, who produce major crops for their own consumption, thus reduce the risk of price increases in uncertain Malagasy national economy. At the same time, they sell most crop immediately after the harvest, in order to reduce another new type of "risk": food-stock loss due to the claims of relatives, which formerly served as a mechanism for risk avoidance. The balance of these two opposite risk-reduction motives characterizes strongly the households in K village. The F villagers, on the other hand, depend on the trade of fish to provide stable foods, despite the the risk of price increases. Their subsistence would be impossible without a large amount of cash income from fishing in remote areas for exported products, such as sea cucumbers and shark fins. Thus, their strategy, can be regarded as profit maximization.